

マギー・マラン

# May B

Maguy Marin 「May B」  
Direction, Choreography: Maguy Marin

「聞かないために発せられる声、  
動かないために動く体」

文：國吉和子（舞踊研究・評論）

Photo : Hervé Deroo

マランは「May B」を振り付けるにあたって、サミュエル・ベケットの演劇から重要な示唆を受けたという。冒頭と幕切れに囁かれる「終わり、終わりだ、終わろうとしている。たぶん終わるだろう。」（「勝負の終わり」より）という科白の引用から、後半にはベケットの芝居ではお馴染みの登場人物達が、無言で紛れ込む。

見事なまでに老体に変身したダンサー達は、ゾンビの行進さながらのグロテスクな集団行動、時折、欲望もむき出しに繰り広げる小競り合いは、まるでこまごまと科白をやり取りしているかのよう。この作品が演劇的ダンスとも言われる所以だろう。

マランは作品コンセプトについて、次のように語る。「……平凡な生の積み重ねの中でなされる様々な身振りを明らかにするために、なにかを待ち、『全く動かないというわけではなく』動きを抑えることで、私達は空虚を、広大な無を、ためらいに満ちた沈黙の空間を創り出したのです。ベケットの登場人物たちは動かないことだけを願いながら、こらえきれずに身動きしてしまうのです……」（1997 年来日当時の資料より）つまり、演劇的ダンスといっても、言葉の意味の伝達ではない。考えないために語られる言葉、聞かないために発せられる声、こうしたベケットの言葉に対応してマランは「動かないために動く体」を取り出して見せる。言葉で体中いっぱいになりながらも、思わず口をつぐんでしまう、そんな体の身振りこそ、実は私達の日常の底深く息づく身振りであり、ダンスと演劇が会う場なのではないだろうか。

舞台後半は、G・ブライアーズの果てしなくループする「Jesus' Blood Never Failed Me Yet」（イエスの血は決して私を見捨てたことはない）の物悲しいフレーズにのって、老人達が荷物を下げて黙々と歩く。その姿は、現在日々報道される難民の姿と重なって見える。人々の列から一人遅れて道に迷う者、忘れ物をとりにいったまま戻らなくなった者、道すがら生まれるささやかな愛の交感——ひたすら歩き続けるリズムに導かれるように切なく寂しく、しかもどこか滑稽にしたたかに繰り返される幕切れの情景は永く心に残る。

マランは「May B」によって、従来のダンスがこれまで取り上げなかった人間の、もっともデリケートな「身振り」を

シンプルな方法で取り出して見せた。この衝撃こそが、初演以来 40 年経てもなお、見るものの心をとらえて離さないのだ。



## マギー・マラン 「May B」

演出・振付：マギー・マラン  
出演：カンパニー・マギー・マラン

2022年11月23日（水・祝）14:00 開演  
（開場時間は決定次第 HP にて発表）

北九州芸術劇場 中劇場

一般 6,000 円  
ペア割（一般）10,000 円（セット数限定）  
ユース 3,000 円（24 歳以下・要身分証提示）  
ペア割（ユース）5,000 円（セット数限定）  
高校生〔的〕チケット 1,500 円  
（枚数限定、劇場窓口・電話／前売のみ取扱、要学生証提示）

※全席指定  
※未就学児入場不可

主催：（公財）北九州芸術文化振興財団 共催：北九州市  
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（劇場・音楽堂等機能強化推進事業）  
独立行政法人日本芸術文化振興会  
後援：在日フランス大使館 / アンステイチュ・フランセ日本



文化庁